第 32 回 上越市公文書センター出前展示会（令和 3 年 10 月～）

「上越の史料が伝える怪異の世界」

古文書や古い新聞をめくっていると、小さいころに読んだり聞いたりした昔話のような不可思議な記事に遭遇（そうぐう）します。事実なのだろうかといぶかしがりながらも、一方でワクワクした気持ちになっている自分がいます。テレビをはじめとするマスコミでも、昔から一定程度の割合で怪異が取り上げられており、その傾向は今後も継続するように思われます。

そこで**今回は、怪しいと思いながらも見たり聞いたりしたくなる不思議な魅力のある怪異に焦点を当て、上越に遺る歴史資料が今に伝える怪異の世界を紹介します。**

江戸時代の日本に UFO・宇宙人が来ていた？

➡ 展示資料 1 参照

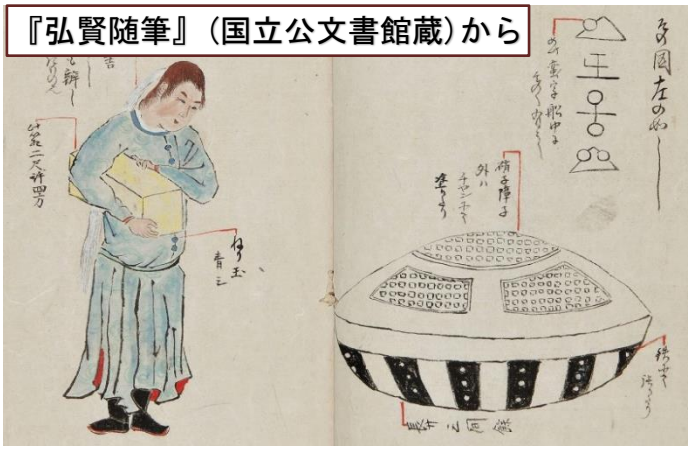
享和（きょうわ）3年（1803年）に、常陸国（ひたちのくに）（茨城県）に漂着したUFOと宇宙人、宇宙文字を記録した文書ではないかとも言われている史料があります。もちろん当時の人は、UFOの存在を知りませんから、当時の人がそれを意図したものではなく、漂着した乗物の形が現在私たちが認識しているUFOの形にそっくりだということから、最近になって生まれた見方です。

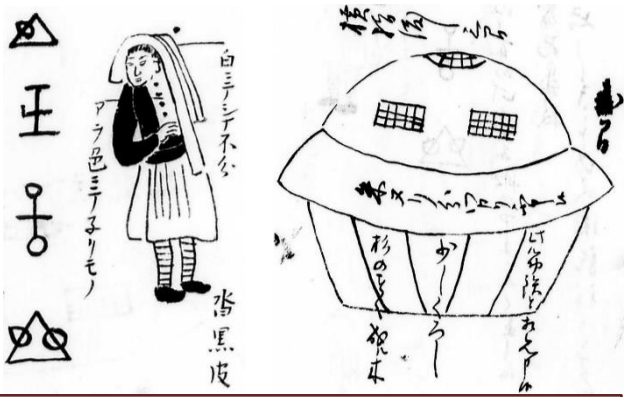
全国にその記録が遺っており、現在十数点確認されているそうですが、下の左図はその一つで**屋代弘賢（やしろひろかた）著『弘賢（こうけん）随筆』**です。他の記録も含めて、乗物の形は確かにUFOとそっくりであり、UFOや宇宙人との遭遇事件の記録かもしれないと想像しても不思議はありません。

そして今回、**上越にも同事件の記録が遺っている**ことが分かりましたので紹介します。下の右図がそれであり、浣花井著**『異聞雑著』**（榊原家文書）です。時（享和3年）と場所（常陸国）、乗物の形がUFOそっくりであること、その中から女性が一人現れ、見慣れない文字が散見されたことなどの記事は、全国の他の記録と共通しています。ただ、決定的な相違点があり、**著者の浣花井（鈴木甘井（かんせい））は記事の最後に、これはフェイクニュースだと私見を述べています。**他の史料でそこまで踏み込んで私見を述べている記事はありません。

さて本事件は、UFOそっくりな外国舟の遭難事件に過ぎないのか、あるいは何らかの意図で創作されたフェイクニュースなのか、真相は謎のままです。中に空洞のある舟を「うつろ舟（虚舟）」と言いますが、本事件以外にも日本各地に**「うつろ舟」伝説**が伝わっているそうです。

『弘賢随筆』（国立公文書館蔵）から





浣花井著『異聞雑著』（高田図書館蔵）から

不思議な現象の記録　＝大火事にも見えた赤い光 と 夜空の怪光＝

寛延4年(1751年)に大地震が上越を襲ったこと（この年は改元して宝暦となりましたので、後に宝暦の大地震と呼ばれます。）、その際に名立で大規模な山崩れが発生したこと（名立崩れと呼ばれます。）は、郷土の歴史に詳しい人にとっては周知の出来事です。ここで紹介したいのは、地震そのものが不思議ということではなく（もちろん当時の人にとっては地震そのものも不思議であったとは思いますが…）、その際に怪現象が目撃されたということです。➡ 詳しくは、展示資料２参照

宝暦大地震は、「高田表大地震之節日記」（榊原家文書）の冒頭に**「地悉裂、所々水沸出、又ハ泥沙吹出。依之御城大破・・・」**とあり、高田や直江津でも多数の死者、震動や液状化による建物全壊等の壊滅的被害を出しました。『異事大概記』（荒町水谷家文書）には、地震の3か月前からの、後で思えば予兆だったのではと考えられる「怪事」が次のとおり列挙されています。

- ◆ **正月29日：赤雪壱寸程降申候（赤い雪が3cmほど積もった）**
- ◆ **4月14日：夜戌ノ刻（午後8時）ヨリ布雲出ル・・長サニ丈余**
- ◆ **4月中旬～：毎日烏ノ鳴聲荒し**
- ◆ **4月25日（当日）：日ノ色薄赤し・・・暮六ツ（午後6時）前ニ烏集リ一群ニナリテ(震源とは反対の）東へ飛行之事数多也**

「竜宮の鐘」のある宗龍寺と背後の山崩れ跡

また、『東遊記』の「名立崩」によれば、地震発生当日の夜、ほとんどの男たちは沖に漁に出ていましたが、陸地方面＝名立一面が赤く大火事のように見えたので、漁を切り上げ戻ってみたところ、実際は何事もなかったとのことでした。しかし、その深夜に地震が発生し、名立は山崩れで埋まって多くの人命が失われました。一体、名立を包んだ大火事にも見間違うほどの赤い光とは何だったのでしょうか？ 地震の予兆だったのでしょうか？ その赤い光さえ見えなければ、漁を途中で切上げることはなく、少なくとも漁に出ていた人たちの命が失われることはなかったことを思うと、やるせない気持ちになります。展示資料２には、後日譚として**宗龍寺の「竜宮の鐘」**についても書いていますので、ご参照ください。

一方、『萬見聞記』（矢沢家文書）からは、２つの怪光現象＝「光物」を紹介します。いずれも何らかの天体現象なのかもしれませんが不明です。➡ 詳しくは、展示資料３参照

A：1839年、夜空に満月くらいの火の玉のような光物が現れ、やがて散乱して龍のような形になった。（筆者が描いた図<展示参照>を見ると、確かに龍のように見えます。）

B：1850年、菅笠くらいの丸い光物が夜空を移動し、まるで昼間のようになった。「雷地震」のように音が鳴り響き、広範囲で観測された。

このような光物の記録は、『吾妻鏡』（鎌倉時代）等に古くから遺されており、ある時は凶兆として、またある時は神仏が現世に現れた姿として登場します。ちなみに、コロナ禍で一世を風靡した「アマビエ」（アマビコ）も、夜間に光と共に海中から現れた予言獣で、光物の一種です。

本当に実在したのか？　＝巨大生物の記録＝

➡ 展示資料４参照

『鮒井雑記』に、文政12年（1829年）の出来事として、**久々野村（板倉区）で起こった山崩れに大蛇が巻き込まれて死に、川を流れ下って来た**という記事があります。**驚くべきは、その大蛇の大きさで、「長さ八間」とありますから、約15メートルということになります。**映画の世界においては有り得ることですし、アマゾン等ならもしかしてとも思いますが、本当に日本、しかも上越にそのような巨大生物が実在したのでしょうか。

『鮒井雑記』の筆者は、友人が江戸で長さ７間の大蛇全骸の天日干しを見た話、別の友人が「鯨さし弐尺」（約75cm）の大蛇頭骨を見た話も載せており、多少の誇張はあるにせよ、現在では考えられない大きさの大蛇が存在したのでしょう。

資料６で紹介する**猫型巨大生物「猫また」**も、その正体は何だったのか興味は尽きません。また、資料７には、『高田新聞』の**「丈は八尺許なれど、最と恐ろしき手足あり耳もある大蛇」**という明治16年（1883年）の記事もあります。これは普通に考えれば大蛇というよりトカゲでしょう。しかし、本当に８尺＝**約2．5メートルの大トカゲが、約140年前の上越に実在したのか**、こちらも興味が尽きません。

高田生まれの妖怪　＝小豆洗＝

➡ 展示資料５参照

「小豆洗」という妖怪を、多くの方はご存知でしょう。そして、イメージするのは右図の姿のそれではないでしょうか。右図は、竹原春泉画『**絵本　百物語**』（天保12<1841>年）の「卅　六　小豆洗」で、同書は鳥山石燕の『画図百鬼夜行』（安永5<1776>年）と並び称される江戸時代を代表する妖怪画集です。

竹原春泉画『絵本　百物語』より

小豆洗（または「小豆磨ぎ」）は、河童や天狗に匹敵する知名度の高い妖怪で、ほぼ全国で伝承されています。その多くが、**谷川や小川で小豆をショキショキと音をさせながら洗う姿の見えない妖怪**という点で一致します。『**新潟県史**』では、「アズキ洗おうか、ザックザック、人とってかもうか、ザックザック」と驚かす十日町市の伝承を紹介しています。その数ある伝承の中から、**『絵本　百物語』では、高田を舞台とする小豆洗の誕生譚を紹介しています。**みなさんは、小豆洗が高田で生まれたという話をご存知だったでしょうか？　どのようにして小豆洗が誕生したのか、高田の寺院を舞台とした伝承の詳細は、展示資料でご確認ください。

その他、上越の妖怪としては、橘崑崙著『**北越奇談**』（文化9<1812>年）には、高田藩領の信越国境に出現する**「山男」**が記されています。また、『**上越市史**』では、『北越奇談』で越後十七不思議に挙げられている**「蓑虫の火」**を昭和30年代に体験した津有地区の人の話、鳥山石燕著『画図百鬼夜行』の**「青鷺火」**を保倉地区の何人もの人が目撃した話を紹介しています。

正体不明の猫型巨大生物　＝猫又＝

➡ 展示資料６参照

天和2年（1682年）に中ノ俣で出没し、人を襲った猫型巨大生物＝猫又の退治譚をご存知の方も多いでしょう。猫又に関する記録は、古くは藤原定家による『明月記』（鎌倉前期）や吉田兼好による『徒然草』（鎌倉後期）にも登場し、人を襲ったとあります。出没場所は、全国各地に伝承が残っており、榊原高田藩領の飛地である奥州釜子陣屋領内でも安政４年（1857年）の出来事として**「凡小馬之如き猫を打取申候」**（青木家文書：高田図書館蔵）との記録が遺っています。

中ノ俣の猫又に関する記録も複数遺っており、いくつか相違点は有りますが、武士による討伐隊が討ち取れなかった猫又を、力持ちである村人：（牛木）吉十郎が病身を押して立ち向かい、最終的には双方共に果てたという点、時は天和年間である点等は共通しています。

中ノ俣の猫又の体長は、頸城郡誌稿関係資料「乍恐以書付申上候」（公文書センター所蔵）によれば「九尺」（約2.7メートル）、『貍實説記』（橋本正富美家文書：公文書センター所蔵）では「九尺四寸」（約2.8メートル）とあり、いずれにしても猫型生物としては巨大です。中ノ俣の猫又退治譚の詳細は、展示資料６でご確認ください。

土橋稲荷神社（猫又稲荷）

なお、退治された猫又の死骸が埋められた場所は、現在の土橋稲荷神社（大町1丁目）の敷地内と伝承されています。同社は後に「猫又稲荷」とも呼ばれるようになり、**「猫が迷子になつた時、猫俣稲荷に願をかければ必ず出て来ると云ふので愛猫家の参詣者があるそうだ」**と『高田新聞』（昭和４年６月２日）は伝えています。

今回は、上越に伝わる歴史資料の中の、あるいは上越が舞台の怪異を取り上げ、紹介しました。本展示で紹介した怪異は、その当時に現在の科学水準があれば、論理的に説明できる現象であったかもしれません。また、伝承に誇張があるかもしれません。しかし、全部が全部、そうであったとは言い切れないのではないでしょうか。

そのような不可思議な現象に対して落としどころを設けて納得したい、そうしないと落ち着かないと考える人間としての性は、今も昔も変わらないはずです。現在の人にとってその手段は科学になりますが、昔の人にとっては、人知の及ばない神仏や怪異を実在するものと想定することでしか解決できなかったのではないでしょうか。その意味で、当時の人にとって怪異や異界が存在することは当たり前であり、リアルそのものです。

怪異の話題に怖い思いを抱きつつ、一方で覗き見たい、場合によっては信じたいと思う現代人の感性には、何でも科学で割り切ることを合理的と考えながらも、そうではない見方や考え方を完全に捨て去ることの愚を漠と感じているからかもしれないと考えさせられました。